中・近世　～亀井畷と新田開発～

中世になると、遺跡内に泥炭層が厚く堆積することが明らかとなっています。平安時代に条里地割が整備され、積極的に水田開発が行われた日置川流域でしたが、なぜか、13 世紀頃には耕地の大部分は放棄され、沼沢地に戻ったと考えられます。

その後、遺跡周辺が再び耕地開発されるのは、江戸時代初めで、遺跡の西側には、鹿野城主であった亀井茲矩（これのり）がつくったとされる亀井畷（なわて）（道路痕跡）の地割が残されています。

江戸時代の絵図には「亀井縄手」の文字が見えます。亀井茲矩は海外志向が強く、積極的に朱印船貿易を行った大名でした。その朱印船貿易の窓口となったのが、青谷（芦崎（あしざき））の港であり、亀井畷は鹿野城から港へ行くためにつくられたとも言われています。

一方で、亀井茲矩が青谷横木遺跡周辺（養郷（ようごう）地区）を新田開発した記録が残っており、亀井畷はそのために造られた道路で、土地区画の基準にもなった可能性があります。

青谷横木遺跡と亀井畷

絵図に残る亀井畷

『気多郡村々井手絵図面』
文政 10 年（1827 年）
鳥取県立博物館所蔵

亀井畷と江戸時代の街道

注目される弥生・古墳時代の出土品

青谷横木遺跡では、弥生時代や古墳時代の出土品もたくさん出土しています。とくに、青谷上寺地遺跡とよく似た弥生時代の木製品が注目されます。なかでも、青谷ブランドというべきデザイン性に優れた、美しい木製高杯などは、青谷上寺地と同じく高度な木工技術を持った「匠」たちがいたことを示す逸品です。

青谷上寺地遺跡
出土木製高杯

弥生古代後期～古墳時代前期の
破鏡（意図的に割られた鏡）

古墳時代の勾玉・管玉

古墳時代前期の木製匙

弥生時代中期の木製高杯

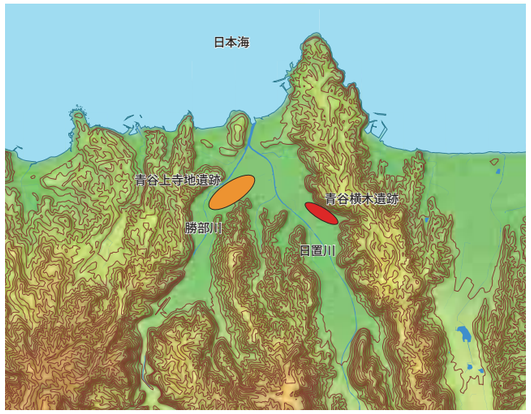
鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取県鳥取市国府町宮下 1260
TEL　0857−27−6711
FAX　0857−27−6712
ホームページ　https://www.pref.tottori.lg.jp/maibun
フェイスブック　www.facebook.com/tottorimaibun

新春特別展示企画第２弾！ 調査担当者こだわりの一品！

Part Ⅳ　もう一つの青谷横木遺跡

鳥取市青谷町にある青谷横木遺跡は、国宝高松塚古墳壁画に次ぐ『女子群像』板絵の出土や、古代山陰道における国内初となる柳の街路樹の発見などで注目を集める、わが国の飛鳥時代から平安時代を代表する遺跡です。

その一方で、発掘調査により縄文時代から古墳時代、中世や近世にかけても青谷地域の歴史を解明していくうえで重要な調査成果が数多く得られています。そこで、今回の展示では、古代以外の時代にスポットを当て、「知られざる青谷横木遺跡」を紹介します。



青谷横木遺跡の位置

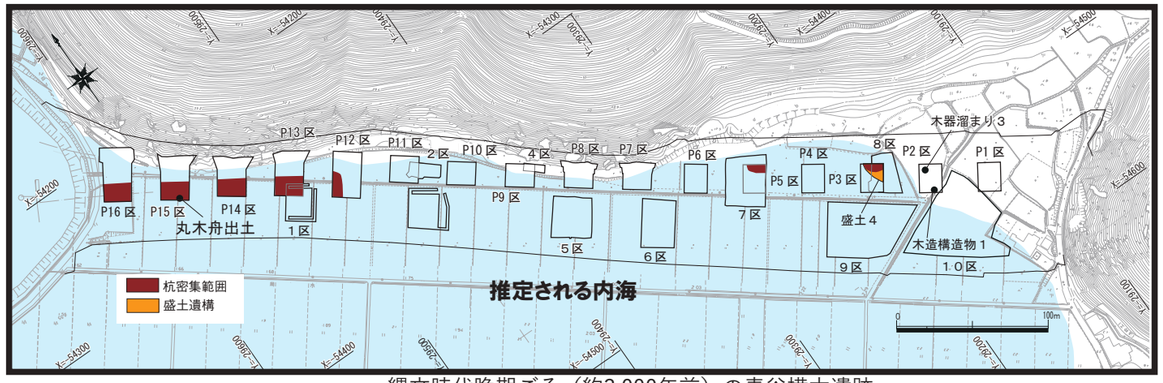
縄文時代　～古青谷湾での生業活動～

縄文時代の遺跡周辺は、古青谷湾と呼ばれる内海が広がっていたと考えられています。発掘調査でも、縄文時代後期から晩期（4,500 ～ 3,000 年前）の貝層が堆積しており、当時、遺跡の大部分が海の底であったことが分かっています。

山裾の水際付近には、200 本以上の杭が貝層に打ち込まれた状態で見つかり、漁業に関連する施設や舟着き場等の接岸施設の一部であった可能性があります。また、全長 6mもある丸木舟が完全な形で発見され、縄文土器もまとまって出土するなど、内海における生業活動の一端を窺うことができます。

貝層に打ち込まれた杭（Ｐ12区）

丸木舟出土状況（Ｐ15区）



縄文時代晩期ごろ（約3,000年前）の青谷横木遺跡

弥生時代～古墳時代初め　～青谷上寺地のとなりムラ～

弥生時前期～中期（約 2,300 年前～ 2,100 年前）

古青谷湾は次第に縮小し、日置川流域の平野部は河川が流れ込む氾濫原となったと考えられます。

弥生時代前期から山裾に大きな河川が形成され、古墳時代後期に至るまで形成され続けたことが明らかとなっています。この河川の山側には、盛土や木造構造物による護岸施設が築かれています。とくに、遺跡中央付近に頑丈な護岸が築かれ、土器や木製品などの遺物も集中して出土することから、この付近の丘陵斜面に小規模なムラが営まれた可能性があります（下図黄色部分）。

一方で、平野部では、畦とみられる盛土が見つかっており、水田としての利用が始まったと考えられます。

弥生時中期終わり頃～古墳時代前期（約 2,000 年前～ 1,700 年前）

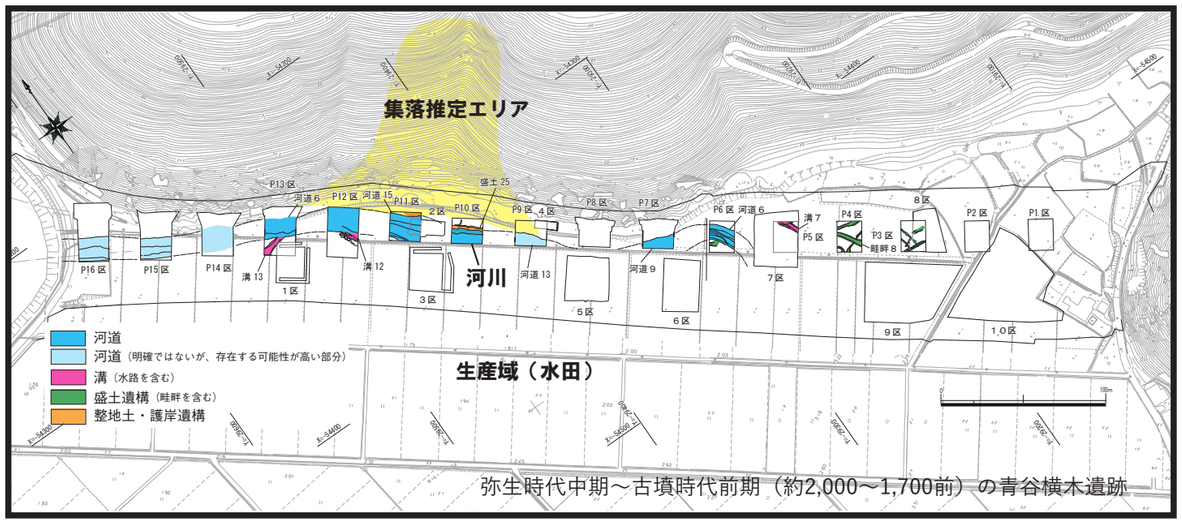
山裾の河川に対して、引き続き盛土などによる護岸が行なわれました。敷地を確保するために土地を造成し、その流出を防ぐための土留めの杭を打ったり、河岸に多量の木くずを投棄することで埋め立てた痕跡も確認されています。度重なる水害にも負けず、山側に想定される集落を守るために必死に土木工事を行った弥生人の姿が目に浮かびます。

平野部は、前代に比べ水田開発が積極的に行なわれるようになりました。畦と考えられる盛土とともに、山裾の河川から水田に水を引いたりした灌漑用の水路も見つかっています。

土留めに打ち込まれた杭列（P 11区）

護岸のために築かれた盛土（P 10区）

盛土の芯に用いられた加工木（P 10区）



弥生時代中期～古墳時代前期（約2,000～1,700前）の青谷横木遺跡

古墳時代中・後期　～阿古山古墳群の造営と水辺の祭祀～

弥生時代から形成され続けた山裾の河川は、古墳時代後期(約 1,500 年前)に入ると、大規模な洪水によって短期間のうちに埋没したと考えられます。

その一方で、山裾には阿古山古墳群が築造され、なかでも遺跡に隣接する 22 号墳は船団や星の線刻壁画を持つことで知られています。調査地内では 24 号墳が調査され、径６m前後の小規模な円墳であることが分かりました。横穴式石室が確認され、石室内からは被葬者が納められた木棺のものと思われる鉄釘が出土しています。

青谷には、勝部川流域に築かれた吉川古墳群にも船の線刻壁画をもつ古墳（吉川 43 号墳）があり、海上交通や港を掌握した豪族がいたことがうかがえます。

飛鳥時代終わりごろ（7 世紀後半）になると、埋没した河川上に古代山陰道と考えられる大規模な道路が建設されます。古代山陰道は、阿古山古墳群の一部をも破壊してつくられた可能性が高く、律令国家の権力の大きさを物語っています。

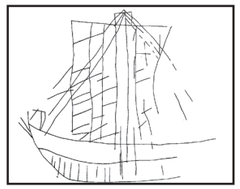
洪水で埋没した河川（P 15区）

阿古山24号墳（P 15区）

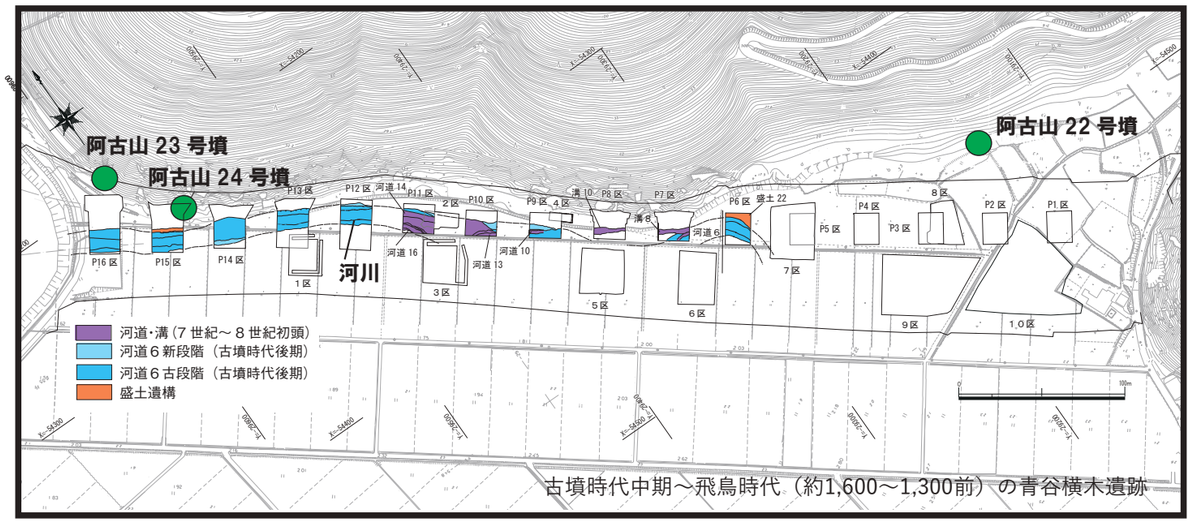
須恵器の杯が、穴の中から 3 個体が重なり、伏せられた状態で出土しています。

他の川岸でもミニチュア土製品、めのう製の勾玉などが出土していることから、水辺の祭祀が執り行われた可能性があります。

川岸に埋納された須恵器（P 10区）


阿古山22号墳
舟の線刻壁画

県指定史跡　阿古山22号墳



古墳時代中期～飛鳥時代（約1,600～1,300前）の青谷横木遺跡